

銀行の融資姿勢変化と企業行動

一橋大学大学院生 岩木 宏道

本稿では戦後の日本で重厚長大産業界への長期資金供給を目的に設立された日本長期信用銀行(LTCB)の破綻とその後の融資方針の大幅な変更という事態に企業の中でも情報の非対称性が緩和されていると考えられる公開企業が直面した資金調達意思決定に関する影響を検証した。本稿の検証の結果, LTCB の破綻前に同行との一定のリレーションを有していたと考えられる企業は LTCB との関係がなくなることでレバレッジの低下に直面した可能性が高く, 負債調達, 株式発行, 内部資金利用という資金調達意思決定においても差を生じさせていた。

銀行の企業に対する融資態様はリレーションシップ型貸出とトランザクション型貸出という二つの分類がなされる中, 公開企業の中でも情報の非対称性の程度が低いと考えられる大企業向け取引を得意としてきた LTCB の融資状況の変化が及ぼす影響に関しての本稿での検証結果は, 大企業であるとしても依然としてリレーションシップ型貸出が重要であった可能性を示唆するものである。さらに, 本稿の結果は, Slovin, Suishka, and Plonchek(1993)が主張するように, 銀行と企業間関係はステイクホルダー関係にあるという見方とも整合的である。